

人は時として物事を難しく捉えてしまいがちです。皆さんは次の話をどう読みますか。その道路は街灯が一つもなく、しかもデコボコの曲がりくねった田舎道。そこを車が猛スピードで通り抜けましたが、なんの交通事故も起きません。なぜでしょう？

「車のライトをハイビームにして通行したから」と考えた方が多かったのではないのでしょうか。答えは「昼間だったから」です。「街灯」という言葉で夜のイメージを呼び込ませるトリック問題でした。

同様に、物事はこうである。こうでなければならぬ、という固執した考えが視野を狭くさせ、周囲に対して悪影響を及ぼすケースもあるのではないのでしょうか。

倫理研究所二代目理事長の丸山竹秋は、「進歩的の石あたま」という論文の中で、次のように記しています。

物質万能が進んで、金が一番大事だと思込んでしまつと、金以上に尊いものがあるのだといつてもなかなか承知しない。金を儲けるためには手段を選ばないといつうふうにもなる。金持ちがいくらばん債のたこつう考えにも、はまりこむ。「金を金の石あたまといつ。頭の悪い筆頭にもあげられよう。揮金石あたまといつてもよい。さらに、何でもかんでも薬を服用しなければ承知できない。「薬の石あたま」や、会社の待遇や条件ばかりを気にかける「条件石あたま」などを取り上げています。

固執してしまつ人間の捉え方を、いずれも「石あたま」と呼んでいます。それは、自分とは間違つていない、という意識に駆られ、



絵・今谷 鉄柱

素直な即行の実践が 柔らかな心身を育む

他のものを排他的に見てしまつ傾向です。そこに改善・改良の余地があるのだと、客観的に振り返つてみる必要があるでしょう。

純粹倫理の実践も同様です。「なぜこんな事態に…」「困つた…」などと悩み続けるのではなく、次の瞬間には実践という働きが経営者には求められます。

繊維工場を営むE氏は、後始末の重要性を感じ、社内に徹底させよつと考えていました。特に目についたのがトイレ内の洗面所で、蛇口が完全に閉まつていないことが多かったのです。そのため水が流れ続けている場面によく出合い、内心では、常習的な人物はあいつだな、と思いつつ、徹底的に後始末をするよう朝礼内で指導したのです。

その後一週間が過ぎ、しつかり蛇口は閉められ、社員の実践が浸透しているなと感じたE氏は、よしよし、と思つていました。

その矢先、トイレに入ると、また蛇口から水が流れていたのです。頭を悩ませたE氏は、倫理法人会の知人に相談し、「社長が率先して実践しなければ社員は変わらない」ということを知つたのです。自ら喜んで進んで蛇口を閉めるよつ言われたE氏は、蛇口を見るたびに実践に打ち込むと、いつしか蛇口がすっかり閉まつているよつになったのです。

経営者からすれば、「なぜ実践しなければならぬのか」と思われるかもしれません。しかし理屈ではなく、柔軟に身体を動かす実践が自然と心を柔らかくし、スナオな性格へと磨いていくのです。そつした経営者の人柄にこそ社員やお客様がついてくるのです。